現前への信と「吐き出されるもの」：「エコノミメーシス」における「音声＝ロゴス中心主義」と信の問題

中谷 碩岐

ジャック・デリダ（1930‐2004）の最も重要な仕事のひとつが「音声＝ロゴス中心主義の形而上学」および「現前の形而上学」への批判であることは間違いない。よく知られているように、とりわけ『グラマトロジーについて』（1967）に代表される 1960 年代の仕事においてデリダは西洋の哲学全体がこれらの形而上学によって規定されていると主張し、その「脱構築」を自身の仕事としていた。本論は、デリダのこうした「形而上学批判」という仕事が 1970 年代半ば以降のデリダ思想においてどのように展開されていくのかについて、ひとつの道程を示すことを試みるものである。

その際本論が注目するのは、比較的知られていないデリダのカント論「エコノミメーシス」（1975）である。『判断力批判』読解を中心的な主題とするこのテクストにおいて、デリダはカントの純粋趣味判断の批判が「音声＝ロゴス中心主義的な体系」（EM87/82）として組織化されていると指摘していた。こうしたデリダの主張は 1960 年代の「音声＝ロゴス中心主義」批判との理論的関係を示唆するものである。しかしながら管見の限りでは、これまでその内実の解明はほとんどなされてこなかった[(1)]。

それに対して本論は「エコノミメーシス」は単に優れた『判断力批判』読解であるというだけではなく、1960 年代から一貫して継続されてきたデリダの「音声＝ロゴス中心主義」批判という仕事のひとつの展開としても理解可能であると主張する。具体的には本論は、デリダが「エコノミメーシス」において『判断力批判』の中に見出す「信 croyance」と「吐き出されるもの le vomi」とを巡る問題系が『グラマトロジーについて』や『声と現象』（1967）といった著作における「音声＝ロゴス中心主義の形而上学」という主題とそれに対する批判という問題系を継承していることを明らかにしたい。こうした作業を通じて本論が提示する新たな解釈枠組みは、1960 年代のデリダの「音声＝ロゴス中心主義」批判との連続性において「エコノミメーシス」を理解することを可能にするだろう。

議論の流れは以下の通りである。第一節では 1960 年代のデリダが提示する「音声＝ロゴス中心主義」に関する議論における「信」という主題に着目し、デリダがそこで我々の「現前への信」ともいうべき態度を言語との関係から主題化していたことを確認する。第二節では「エコノミメーシス」におけるデリダの『判断力批判』読解を「信」を巡る議論として解釈し、デリダ

がカントの中に見出した「音声＝ロゴス中心主義」と上記の「現前への信」との理論的関係を検討する。最後に第三節では「エコノミメーシス」の「音声＝ロゴス中心主義」批判の位相を前期デリダの議論との関係から検討した上で、デリダがカントにおける「吐き出されるもの」というモチーフを「現前への信」に回収されない、「音声＝ロゴス中心主義」の外部を思考する契機として積極的に評価していたことを確認する。

1.　前期デリダの形而上学批判と「現前への信」

最初に本節では、一般に「前期」と呼ばれる 1960 年代のデリダの著作において提示された「音声＝ロゴス中心主義の形而上学」「現前の形而上学」に関する議論について、特に「信」という主題に注目して検討し、そこで我々の「現前への信」ともいうべき態度が問題にされていたことを示したい(2)。

デリダは主著『グラマトロジーについて』において「現前の形而上学」、そして「音声＝ロゴス中心主義の形而上学」がプラトン以来西洋の哲学全体を規定してきたと主張する(3)。この「形而上学」は真理を表現する媒体としての声（パロール）の特権視や「存在」の意味を「現前する存在者」に限定するといった点において特徴づけられるが、こうした立場はヘーゲルの絶対知において極限に達する。デリダによれば、ヘーゲルの絶対知の地平は「ロゴスにおけるエクリチュールの消失」（DG40）を帰結する。すなわちこの「形而上学」の立場においては、現前して存在する対象を覆い隠す不透明性を持つ文字（エクリチュール）は劣位に置かれ、反対に対象を透明かつ無媒介的に表現する媒体としての声（パロール）は、絶対的な「知」に到達するために適したものとして評価されるのである。論旨を明瞭にするため本論では立ち入らないが、簡潔に述べれば『グラマトロジーについて』や『声と現象』（1967）において、デリダはパロールを重視するこうした「形而上学」において排除されるエクリチュールが実際にはその可能性の条件であることを示すことで、こうした「形而上学」をいわば「脱構築」していた、と要約することができるだろう。

さて、本論にとって重要なのは、ある箇所でデリダがこの「形而上学」の立場を「信」によって特徴づけているということである。引用しよう。

> 現前の形而上学の内部では[…]歴史の閉鎖としての絶対知を、我々はなんの躊躇いもなく信じている。我々は、文字通りそれを信じている。そ

して、そのような閉鎖が起こったということを信じているのである。（VP115）

我々の欲望が信じずにはいられなくなっていることに反して、事象そのものは、つねに逃げ去るのである。（VP117）

既に確認したように、ヘーゲルの絶対知に象徴される「現前の形而上学」「音声＝ロゴス中心主義の形而上学」とは、記号の不透明性を「声」の透明性によって解消することで、権利上対象そのものを直観することが可能であるとみなす立場であった。この箇所でデリダはこの絶対知への我々の「信」が「事象そのもの」に即しておらず、それはある種の錯覚であると批判している。しかし本論が注目したいのは、そうした批判にもかかわらずデリダが同時にこの形而上学を「我々の欲望が信じずにはいられなくなっている」こと自体については認めているということである。

なぜ我々は「現前の形而上学」あるいは「音声＝ロゴス中心主義の形而上学」を「信じずにはいられない」のだろうか。本論の考えでは、それは我々が使用する理性的な、有意味な言語が本質的にこの「形而上学」に規定されているからである。我々が使用する言語は意味を「表現」するものとして定義されているが、この時その語の意味は表現媒体から独立して「現前」するものとみなされる。こうした点においてデリダは、こうした有意味な言語を「音声＝ロゴス中心主義」や「現前の形而上学」に規定されたものであるとみなすのである(4)。そしてデリダは我々がこのように言語を「表現」として表象することをある種の「超越論的錯覚」（Po45）と呼び、その不可避性を強調していた。我々はこの「西洋の形而上学の言語」（Po29）をしか使用できないのであり、我々が言語を使用する以上、この「形而上学」と端的に縁を切ることは出来ないのである(5)。

ここまでの議論を整理しよう。1960 年代のデリダは「音声＝ロゴス中心主義の形而上学」「現前の形而上学」への我々の態度を「信」として提示していた。デリダによれば我々はこの形而上学に捕らわれているのだが、そこで我々が使用する理性的言語は、何らかの現前する対象や意味を二次的に表現する媒体として定義される。逆に言えば、我々がそうした言語をしか使用できないが故に、言語はこうした形而上学への「信」を惹起するのであり、その時我々は記号の背後に現前する対象そのものを想定せざるを得ない。本論では、「表現」として定義された言語を使用することによって対象そのものの現前を信じる我々の態度を「現前への信」と定式化しよう。言語が惹起するこの

「信」において「音声＝ロゴス中心主義の形而上学」は保持されるのである。

では、こうした「音声＝ロゴス中心主義」を巡る議論は「エコノミメーシス」においてどのように展開されているのだろうか。既に確認したように「エコノミメーシス」においてデリダはカントの『判断力批判』における純粋趣味判断の批判が「音声＝ロゴス中心主義的な体系」として組織化されていると主張していた。そして本論の考えでは、そこでもまた「現前への信」が問題となっていたのである。

2. 「エコノミメーシス」における「音声＝ロゴス中心主義」と信の問題

本節では「エコノミメーシス」における『判断力批判』読解を検討し、デリダがカントの中に見出した「音声＝ロゴス中心主義」について、とりわけ「信」という主題に着目することで、その内実を明らかにしたい。結論から言えばデリダは、カントにおいて美的判断が成立する条件として我々の言語への「信」が存在すると解釈し、その「信」を可能にする詩の性質の中にカントの「音声＝ロゴス中心主義」を見出していた。

以下、その内実を確認しよう。よく知られているように、カントにおいて美的判断は「没関心的」、すなわち客観的な現実存在に対する「関心」から切り離されたものでなければならない。しかし同時にカントは『判断力批判』第 42 節において、美的判断はその没関心性にもかかわらず、自然に関するある種の関心を生じさせることを示唆していた。カントによれば、美的判断においては「「自然こそがくだんの美を産みだした」とする考えが、直観と反省とにともなっていなければならない」（カント[2015]266）。カントに従えば人は「自然」の産出物をのみ美しいと感じるのであり、人間の手による芸術美もまた、自然の産出の模倣としてのみ美しいのである（cf. EM69/34）。

しかしこの美を産出する「自然」なるものは理念であり、それ故直観することも概念的に把握することもできない。実際のところそれは、美的な対象という「自然がその美しい諸形式をつうじて形象的なしかたで私たちに語りかけてくる暗号文字 chiffreschrift」（カント[2015]268）を通じて提示されるに過ぎないのである。とはいえ同時に他方で、こうした直接的に知ることの出来ない、美を産出する自然への関心は単なる錯覚なのではない。デリダは美しい色彩を見た我々が抱く自然への関心を「自然の言語」に対する「信」として定式化していた。引用しよう。

> わたしたちは様々な色彩を一つの自然の言語として解釈する。そして、そうした解釈的な関心こそが重要なのである。問題なのは、自然が私たちに語るのかどうかを知ること、こう言おうとしているのか、ああ言おうとしているのか、を知ることではない。そうではなく、私たちが暗号化された言語の誠実さ、忠実さ、信憑性を信じている、ということである。たとえその客観的な統御が不可能なままにとどまるにせよ、そうなのである。（EM78-79/60）

ここでデリダが述べているのは、美的判断において提示される「暗号化された言語」の「誠実さ sincérité」「忠実さ royauté」を我々が「信じている」が故に、我々は美的対象が自然の産物であると考えるということである。

どういうことか。カントはある箇所で、鳥の囀りや花の美しさを愛でる人はそれが自然の産物であると「信じている」が故にその美しさを愛でるのであり、それが声真似や造花であることを「知る」とその美しさは消滅すると述べていた（cf. カント[2015]266, 271）。この時、鳥や花を愛でる人はそれが自然の鳥であり花であることを「知っている」と考えていた筈である。しかし実際にはその人はそれを「信じていた」に過ぎない。何故なら、実際には鳥や花が作り物であるという事態、言い換えれば自然の産物ではないという事態があり得たのであるから。つまり、美的判断において我々は美しい対象を産出したものがほかならぬ自然であると「信じている」。そしてこの「信」こそが美的判断を成立させる条件であるとデリダは考えているのである。デリダはここに「第三批判における記号作用の固有の場」（EM77/55）を見出す。それはこの「信」と「知」の齟齬が、我々が「暗号文字」として美的な対象を認識し、その上でそれを他ならぬ自然の所産、「自然の言語」であると解釈することによって引き起こされるからである。

しかしそうだとすれば、なぜ人はこの「暗号」が自然によって語られたものであると「信じる」のだろうか。ここで人が「信じている」とされているのは、言語の「誠実さ」と「忠実さ」であった。デリダによれば、こうした言語の「誠実さ」と「忠実さ」はカントが芸術の最高の地位を与える「詩 Poésie/Dichtkunst」の性質において範例的に反復される（cf. EM79/60）。言い換えれば、詩の「誠実さ」「忠実さ」において、我々はそれが自然の所産であると「信じる」のである。そして本論の考えでは、デリダは美の条件であるこの信を惹起する詩の「誠実さ」「忠実さ」を「構想力の自由な戯れという形式の保持」と「美的理念の表現」という二つの点から説明し、その中でカ

ントの「音声＝ロゴス中心主義」を指摘していた。

順を追って確認しよう。カントにおいて詩とは「構想力の自由な戯れを悟性の仕事として遂行する技術」（カント[2015]301）であり、この時詩は具体的な言語表現や概念を超えた「思考の充溢 une plénitude de pensée/Gedankenfülle」（EM83/70）によって我々の意識を生気付け、美的理念へと到達させることで美を産出する（cf. カント[2015]310）ものであった。

このとき第一に、天才の詩はその形式において美一般の条件である「構想力の自由な戯れ」を維持する限りにおいて「誠実」である。カントが詩に対置する「雄弁 Éloquence/Bredsamkeit」においては、我々は弁論家がその説得の技法によって我々を欺こうとしているのではないかと疑わざるを得ない。それに対して天才の詩はその形式において「構想力の自由な戯れ」を維持するが故に「あたかも単なる自然の産物であるかのように」（カント[2015]277）我々に感じさせるのであり、したがってこの天才の詩を聴いた人にそれが自然の所産であると「信じさせる」のである。

第二に詩は、それが美的理念を直接的に表現するものである限りにおいて「忠実」である。デリダは「美は理念の表現である」という命題がカントの「公理」（EM80/65、cf. カント[2015]300）であると強調していた。天才はこの理念を自然から受け取り、それを芸術という仕方で表現する（cf. EM74/48）のだが、この時詩が美の産出の範例であるのは、それが直接的に美的理念を表現するからである。例えば造形芸術が美的理念を感覚的な直観を介して表現しなければならないのに対して、詩の媒体である言語的音声においては「内部性が直接に表現される」（EM84/75）。したがって、詩はそれが正確に美的理念を表現する限りにおいて「自らの内に含まれた内容へと忠実に適合している」（EM83/70）のである。

そしてこの時、美的理念を透明に表現することが出来る理想的な媒体として、詩における「声」が特権視されている点において、デリダはカントの「音声＝ロゴス中心主義」を指摘する。第一節で確認した通り、「音声＝ロゴス中心主義」において声（パロール）は透明な表現媒体であるとみなされており、それ故表現されるものに最も近いとされていた（cf. DG22）。このように理念を忠実に表現することが可能な透明な媒体として「声」を理解しているからこそ、カントは詩の「声」を特権視し、詩を芸術の最高位に置くのである。

ここまでの議論を整理しよう。本節がここまで問題にしてきたのは、なぜ人は美的判断において美的な対象を「自然の言語」であると「信じる」のか、ということであった。その理由は、美の産出の範例としての詩の「誠実さ」と「忠実さ」に見出すことが出来る。図式的に整理すれば、詩はその形式に

おいて「構想力の自由な戯れ」を維持する点において「誠実」なのであり、その「声」の透明性において美的理念を透明に表現する点において「忠実」なのである。詩のこうした性質が我々の「信」を可能にするのだが、とりわけこの「声」の特権視において、デリダはカントにおける「音声＝ロゴス中心主義」を指摘していたのであった。

美的判断におけるこうした我々の「信」を取り上げるデリダの議論は、本論が第一節で取り上げた「現前への信」へのデリダの注目を引き継ぐものとして理解できる。前期デリダにおいて「現前への信」は言語の外に現前する対象を意味として持つような言語によって惹起されるのであった。確かに美の産出の範例たる天才の詩は、意味を表現するような理性的言語や概念とは厳密に区別される。しかし本節で確認したように、カントにおいて天才による詩はそれが「あたかも自然の所産であるかのように」美を産出するために「美的理念の（忠実な）表現」として定義されている。そしてその「忠実さ」を可能にする媒体である声の特権視において、デリダはカントの「音声＝ロゴス中心主義」を指摘していた。この時、天才の詩は言語表現の背後に存在する「美的理念」を表現するものであり、その限りで第一節において定式化した「現前への信」を惹起する言語の性質に当てはまるといえるだろう。

つまり「エコノミメーシス」においてデリダは、天才の詩を範例とする『判断力批判』の美に関する議論は詩の言語が「現前への信」を惹起するものとして規定されていることによって可能となっており、その点において「音声＝ロゴス中心主義的な体系」として組織化されていると主張するのである。

3.　「吐き出されるもの」:「現前への信」の外部へ

前節では「エコノミメーシス」においてデリダがカントに見出していた「音声＝ロゴス中心主義」の内実を、デリダの『判断力批判』読解における「信」の主題の検討を通じて明らかにした。既に確認したように、このデリダの仕事は 1960 年代の「音声＝ロゴス中心主義」批判を継承するものであった。

とはいえこうした議論の継承は、単に同一の主題の機械的な反復ではない。「エコノミメーシス」において『判断力批判』における純粋趣味判断を主題的に扱う時、デリダは『判断力批判』序論（cf. カント[2015]30）を引きつつ美的経験における「快」が単に「美的な」経験に特徴的なものではなく（『純粋理性批判』の対象であるような）認識の経験一般にも本質的に含まれているのだと主張していた（cf. EM65/24）。デリダは言う。「自然は－認識の対象である自然は－、ひとつのアートであっただろう」（EM68/33）。つまり「エ

コノミメーシス」においてデリダは第二節で論じてきたような『判断力批判』における美的経験の分析を、一般的な意味での美学的なものとしてというより、いわば「一次的なものとしての美的経験」（EM76/53）の分析として論じているのである。

第一節で確認したように、1960 年代のデリダは「音声＝ロゴス中心主義」を主題とするに際して、「現前への信」を惹起する有意味な言語表現に着目していた。「エコノミメーシス」の議論は、この「現前への信」が前-言語的であると思われるような美的経験において既に機能しているとデリダが考えていたことを示している。したがって、たとえば「音声＝ロゴス中心主義」から脱するために有意味な言語を放棄したとしても、なお「音声＝ロゴス中心主義」は深層において温存されるのである。「音声＝ロゴス中心主義の形而上学」を分析するに際して、一見前-言語的であると思われるような美的経験における「現前への信」を主題化している点において、「エコノミメーシス」は 1960 年代の議論を更に深化させたものとみなすことが出来る(6)。

しかし同時に、デリダ自身の企図が「音声＝ロゴス中心主義」の批判であったことを想起する必要があるだろう。本論の考えでは、デリダは「エコノミメーシス」においてカントの「音声＝ロゴス中心主義」を取り上げるだけでなく、その可能性の条件たる「信」がもはや不可能となる地点をも思考しようとしていた。こうした観点から見た時「エコノミメーシス」後半部においてカントの『実用的見地における人間学』について議論する際に、デリダがカントにおける美的経験の領野から排除される残余を問題にしていたことは注目に値する。引用しよう。

> 口が良いとみなすもの、あるいは口が悪いとみなすものがあるのであって、これは感性に応じて、あるいは理念性に応じてそうみなされる。同様に、口に入る仕方や口から出る仕方も二つの仕方がある。すなわち、その一方は表現的かつ発信的な仕方である（最良の場合には、詩人が詩を表現し、発信する仕方である）。そして他方は、むかつきや吐き気を催させ、嘔吐させるものであろう。（EM79-80/63）

ここで詩の対極に定位され、美的経験から絶対的に排除される「嘔吐させるもの」は「吐き出されるもの le vomi」（EM87/83）とも言い換えられるが、デリダはこうした「吐き出されるもの」の排除が『判断力批判』における趣味の体系にその形式を与えていると主張する（cf. EM87/91）。このデリダの

主張は極めて挑発的なものであり、カント解釈としての是非は改めて問われる必要があるだろう。しかし既に確認したように、デリダは『判断力批判』における趣味判断に関する議論を、自然への「信」を惹起する「詩」の持つ特権を保証するヒエラルキーとしての「音声＝ロゴス中心主義的な体系」として解釈していた。すなわち、ここでデリダは「吐き出されるもの」の排除こそが「音声＝ロゴス中心主義」の領域を画定すると主張しているのである。

では、この「吐き出されるもの」とはいったい何であるのか。「このような問いに答えはない」(EM87/82)とデリダは言う。こうしたデリダの主張は「吐き出されるもの」の独自の位相に起因する。何故ならこの「吐き出されるもの」は「一次的なものとしての美的経験」において、すなわち言語や概念による表象以前において排除されるが故に、原理上認識や表象の対象になることはないのであるから(7)。したがってそれは「表象しえない、名付け得ない、可知的でなく、可感的でもない、同化し得ない、猥雑なものである」（EM92/96)。この「吐き出されるもの」の排除は理性的な判断による排除ではなく、いわば条件反射的な嫌悪なのである。

本論の観点から見てここで重要なのは、こうした「吐き出されるもの」が主体の「信」と断絶し、それを不可能にするものとして提示されていることである（cf. EM88/84)。『判断力批判』の純粋趣味判断の体系においては、醜いものや恐ろしいものでさえそれが美を産出する自然の所産であると「信じる」ことができ、そしてそこに美しさを見出すことが出来る（cf. カント[2015]286)。それに対してこの「吐き出されるもの」は、それが否応なく条件反射な排除を引きおこすが故に、我々はそれが自然の所産であると「信じる」ことは出来ず、美は破壊される。すなわち、この「吐き出されるもの」はカントの純粋趣味判断の体系の中に存在するにもかかわらず、美的判断における「信」へと回収されない。そしてこの点においてデリダはこの「吐き出されるもの」を音声＝ロゴス中心主義の「体系の絶対的な他者」(EM90/88)として、すなわち形而上学への我々の「信」を不可能にするものとして取り上げるのである。

4.　結論

以上「信」という主題に着目して「エコノミメーシス」におけるデリダのカント読解を解釈し、それが 1960 年代のデリダの中心的主題である「音声＝ロゴス中心主義」批判とどのように関係しているのかを明らかにした。「音声＝ロゴス中心主義」によって規定された言語によって惹起される「現前へ

の信」は、一見前言語的なものであるような美的経験を扱う『判断力批判』においても回帰する。そして「エコノミメーシス」においてデリダは『判断力批判』における美的判断の中に存在する「信」の構造を分析し、それが排除する「吐き出されるもの」に注目することでカントの「音声＝ロゴス中心主義」を批判し、その外部を思考しようとしていたのであった。

こうしたデリダの身振りにある種の政治性を見て取ることもできるだろう。「エコノミメーシス」冒頭でデリダは『判断力批判』の中に「ひとつの政治学 une politique」（EM57/3）を見出していた。本論の考えでは、それは詩を頂点とし「吐き出されるもの」を排除するカントの「音声＝ロゴス中心主義」である。しかしカントの美の体系から「吐き出されるもの」に着目するデリダが「美とは、もっと別のかたちで練り上げられる形成の仕方も備えている」（EM64/22-23）と言う時、デリダは「吐き出されるもの」を軸としてカントの美の体系を揺り動かす可能性を示唆しているように思われる。その意味で「エコノミメーシス」は「信」という主題に着目することで従来の価値のヒエラルキーの転倒/脱構築の可能性を希求する政治的なテクストであり、前期デリダの「音声＝ロゴス中心主義」批判といわゆる「政治的-倫理的転回」以降の後期デリダの議論を架橋する可能性を宿している。

紙幅の都合上その具体的な解明には別稿を期さなければならない(8)。しかし「エコノミメーシス」を「音声＝ロゴス中心主義」における「信」への批判という前期から一貫した営みとして解釈する本論の試みは、前期と後期のデリダの仕事を接続する後続の研究のひとつの道標となり得るだろう。

注

（1）そもそも田島が指摘するように「エコノミメーシス」は従来「カント第三批判研究だけでなく、デリダ哲学研究においてもあまり本格的に研究されてこなかった」（田島[2019]182）。とはいえ全く先行研究が存在しないわけではなく、本邦の主要な先行研究として小森[2004]、宮﨑[2009]、そして上記の田島[2019]を挙げることが出来る。とりわけ田島の研究はカントにおける「音声＝ロゴス中心主義」に注目している点で本論と視点を共有するが、田島は前期デリダの「音声＝ロゴス中心主義」批判について論じておらず、カントにおける「音声＝ロゴス中心主義」をデリダのカント『人間学』読解から説明している。詳細は第二節で論じるが、それに対して本論は「音声＝ロゴス中心主義」をむしろ言語の性質を巡るものとして解釈し、1960 年代から継続する「現前への信」という主題が「エコノミメーシス」においても問題になっていることをむしろ『判断力批判』における美的判断に対するデリ

ダの解釈から示すことを試みる。管見の限りでは、海外においてもSpivak[1993]や Gyenge[2020]などマルクスやカント、バタイユとの関係からこの著作を扱うことが多く、本論が注目する前期デリダの「音声=ロゴス中心主義」批判との関係や「信」の主題については十分に論じられてこなかったように思われる。

（2）1960年代のデリダの形而上学批判に「信 croyance」という主題を見出すという本論第一節の議論は、長坂真澄の一連の仕事（cf. 長坂[2012]、長坂[2015]）に大きな示唆を受けた。ただし長坂が『声と現象』に代表されるデリダの現象学研究という文脈を中心に「信」の問題を論じるのに対して、本論はこの主題を「音声＝ロゴス中心主義」との関係において解釈し、その1970年代以降の展開を示すことを試みる。

（3）『グラマトロジーについて』第一部において論じられるように「音声中心主義」「ロゴス中心主義」「現前の形而上学」は「合致」し「密接に関連する」（DG23）。本論ではこれらの様々な内的な差異には立ち入らない。

（4）前期デリダにおいて「現前の形而上学」に規定された有意味な言語が普遍的であるとみなされているということについて、特に現象学研究という文脈において論じた先行研究として、中谷[2023]を参照。

（5）亀井大輔は「形而上学を批判するに際して必然的に形而上学に属さなければならない」というこの前期デリダの立場を「歴史主義のアポリア」という仕方で論じている（cf.亀井[2019]43-62）。

（6）「エコノミメーシス」におけるこうしたデリダの議論は、フッサール現象学における「前-言語的」な位相に絡み合う言語的な働きを論じた「形式と〈言わんとする作用〉」（1972）との議論の連続性を示唆するものであるが、紙幅の都合上その検討は別稿を期したい。

（7）ただし同時に、これが「吐き出されるもの」と名指されてしまった時点で、それは再び「ロゴス中心主義」の言説の中に「ロゴス中心主義の他者」という意味を持つものとして回収されてしまうことになる。実際「エコノミメーシス」末尾でデリダは、哲学の内部で論じられるこの「語」自体が絶対的他者との遭遇の衝撃を和らげる「エリキシル剤 élixir」に過ぎないと指摘していた（cf. EM93/97）。その点で、注5で指摘したようなアポリアはなお解消されていない。

（8）たとえば『信と知』（1996）におけるデリダの「知とは何かを知っていると信じることである」（cf. FS49）という主張は、本論が検討してきた「エコノミメーシス」の議論の延長線上において理解し得るものであるだろう。

文献表

Jacques Derrida の著作からの引用、参照の際は、対応する文献の末尾に記載した略号の後に原著頁数を記す(例：ED71)。ただし頻繁に参照を行う「エコノミメーシス（EM)」のみ、読解の補助となるよう原著頁数の後に邦訳の頁数を付した。また、引用中[…]は省略、〔〕内は筆者による補足を表す。引用に際しては基本的に既訳を尊重したが、適宜筆者の責任で訳文を変更した。

・Jacques Derrida の著作

Jacques Derrida, 1967, *L'écriture et la différence*, Seuil. （ED）

Jacques Derrida, 1967, *De la Grammatologie*, Minuit. （DG）

Jacques Derrida, 1967, *La voix et le phénomène. Introduction au problème du signe dans la phénoménologie de Husserl*, PUF. （VP）

Jacques Derrida, 1972, *Positions*, Minuit. （Po）

Jacques Derrida, 1975, "Economimesis" in *Mimesis – des articulations*. Sylviane Agacinski et al, Aubier-Flammarion, 55-93./ジャック・デリダ, 2006, 『エコノミメーシス』湯浅博雄・小森謙一郎訳, 未來社.（EM）

Jacques Derrida, 2000, *Foi et savoir, suivi de Le siècle et le pardon*, collection points, Seuil. (FS)

・そのほかの文献

イマヌエル・カント, 2015, 『判断力批判』熊野純彦訳, 作品社.

亀井大輔, 2019, 『デリダ　歴史の思考』法政大学出版局.

小森謙一郎, 2004, 『デリダの政治経済学　―労働・家族・世界』御茶ノ水書房.

田島樹里奈, 2019, 『デリダのポリティカル・エコノミー：パレルゴン・自己免疫・暴力』北樹出版.

長坂真澄, 2012, 「不可能性の可能性――デリダのフッサール読解から浮かび上がる信の概念――」『フランス哲学・思想研究 第 17 号』日仏哲学会, 161-169.

長坂真澄, 2015, 「知の不可能性において語る声――ジャック・デリダ『声と現象』 再読」『宗教哲学研究 第 32 号』宗教哲学会, 109-122.

中谷碩岐, 2023, 「前期デリダの現象学受容におけるフーコーの位置付け－『言葉と物』と『グラマトロジーについて』におけるエピステーメー概念に着目して－」『フランス哲学・思想研究 第 28 号』日仏哲学会, 246-257.

宮﨑裕助, 2009, 『判断と崇高 カント美学のポリティクス』知泉書館.

Andrea Gyenge, 2020, "DIGESTION AND THE INFINITY OF LABOR.", *Angelaki*, Volume 25, Issue 5, 118-136.

Gayatri Chakravorty Spivak, 1993, “Limits and Openings of Marx in Derrida,” in *Outside in the Teaching Machine*, Routledge, 107-133.